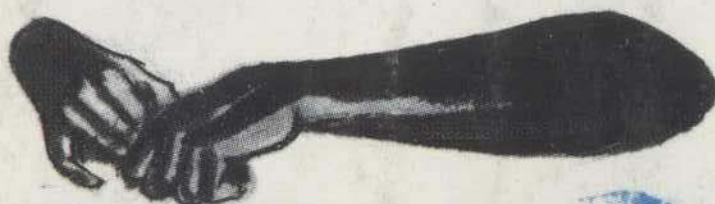
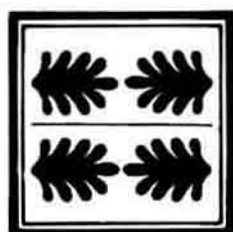


我が炎 死なず

黒岩重吾





講談社文庫

我が炎 死なず

黒岩重吾

昭和53年 9 月15日第 1 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Jugo Kuroiwa 1978

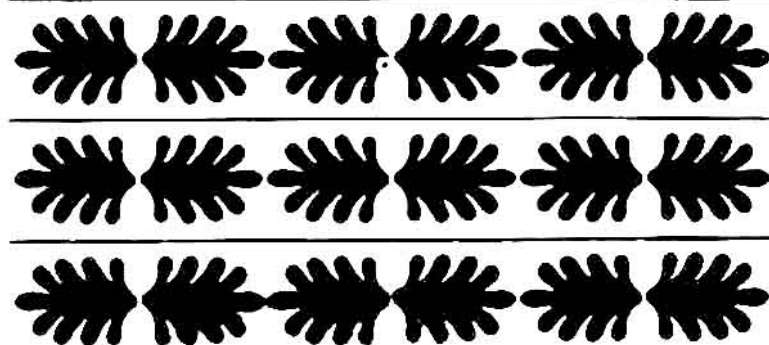
Printed in Japan

0193-314657-2253(0) 340円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

我が炎死なず

黒岩重吾



講談社

目次

我が炎死なず

解説

年譜

小松伸六

三三

三三

五

我が炎死なず

1

昭和四十八年の一月三日から、私は白馬にある山小屋に行った。白馬は日本でも有数の積雪量の多いところである。冬、白馬を訪れる人達はスキーが目的である。

私は足が悪いのでスキーが出来ない。仕方なく自室にこもって仕事に専念することにした。窓から眺めると、娘達はスノーボードに乗って遊んでいる。隣家の庭に雪を積み上げ、スノーボード用の遊び場がつけられていた。

小学校二年の娘が、同じクラスのボーイフレンドと、スノーボードでジャンプしている。娘と視線が合うと、娘は窓の下まで来て、私にも、一緒に遊ぼうという。

私は息抜きに外に出た。見ていると子供達は楽々と二米^{メートル}ほどジャンプしてすべっている。

娘と一緒に遊ぼうとしきりにいうので、私もスノーボードに乗ってすべった。手で雪を押しながらスピードを増し思い切りジャンプしてみた。私を乗せたスノーボードは確かに恰好^{かっこう}良くジャンプしたが、落下した瞬間、私は尻に激痛を覚え、息が出来なくなり、雪の上に転がってしまった。

起きようとしても激痛で起きられない。私が身体を弓のように曲げて唸っていると、妻が驚いてやって来た。

妻の顔がぼやけて見え、私はふと背骨を折ったのではないか、という恐怖心に心臓も凍る思いだった。背骨を折ったら、また動けなくなる。それこそ、廃人である。

私は妻に助け起され、どうにか家まで戻ることが出来た。だが腰の痛みは七日、堺の自宅に帰るまで取れなかった。

幸い骨に異常がなかったので、次第に回復しているが、私は腰を打った三日の夜、痛み以身動きも出来ず、眠りも出来ず、ただ横になって天井を眺めながら、今更のように二十年前の絶望的な日々を思い出したのだった。

丁度、今から二十年前の昭和二十八年、私は僅か一週間ほどの間に全身が動かなくなり、中之島公園の傍にある回生病院に入院したのである。

そして、二十八年から三十一年まで、約四年間、その病院の神経科で闘病生活を送ったのだ。最初の一年間は全身が動かず、全く丸太棒のようにベッドの上に転がっているだけだった。それから徐々に回復して、松葉杖で歩けるようになったのが二年め、どうにか、松葉杖なしで歩けたのは三年めだった。

二十年たった現在でも足に後遺症があり、普通の人のようには歩けない。

それでも、ここまで回復したのは奇蹟的で、全身が動かなかった最初の一年間は、廃人のまま一生を過すことになるだろうと思い、何度か真剣に死を考えた。当時の私の病名は、脊髓灰白髄炎、となっている。これは別名、小児麻痺だが、私の脊髓液からは小児麻痺ウイルスは発

見されていない。

他のビールスが発見されたそうだから、ビールス菌のために全身が動かなくなったのに間違いないが、何万人にいや何十万人に一人の奇病であろう。というのは、私は昭和三十七年にも、麻痺が再発し、呼吸困難になり、鉄の肺にも入ったのである。その時は、脊髓液からビールス菌は発見されなかったから、果して、最初の全身麻痺がビールスのせいかどうか、今でも私は疑問に思っている。

それにしても、この小説を書くに当って、腰を痛めて、身動き出来なくなったのも、奇妙な偶然である。

そのために、私は、当時の、絶望的な陰惨な生活を、昨日のことのように思い出すことが出来た。といつて、私は何もノンフィクション的な闘病記を書く積りはない。私にとってこの小説は、私が何時か書かねばならないと思っていた小説である。

終戦後、私はソ満国境から祖国に復員した。大阪の街は廢墟と化し、私は大学に復学はしたものの、余り学校には出ず、闇ブローカーをして金を稼ぎ、酒色に耽溺していた。

現在、妻になつてゐる秀子との恋愛にも破れ、信じられるものは、自分の肌が感じる悦楽感だけだという虚無的な気持で、放埒な生活を送つていたのである。

だから大学を卒業しても、勤めもせず、相変らず闇ブローカーで稼いでいた。

少年時代からものを書くのが好きで、作家になりたい、という気持はあったが、それはまだ私

の中で煮え詰ってはいなかった。ところが、そんな時、父が亡くなった。

父は酒は少々飲むが煙草も喫わない、真面目な電気技師だった。今の関西電力の前身である日本発送電に勤めていたが、停年を眼の前にして、心臓麻痺で倒れたのである。

亡くなる直前には、讞言で、

「重吾の勤め先はもう決ったのか」

といった。

サラリーマンとして三十年以上勤めた父が、大学を出たのに就職もせず、ぶらぶら遊んでいる私のことを気に病んでいたのを、私はその讞言で初めて知った。面と向って説教されたら、反抗するが、死を前にした讞言だけに、私は凄く狼狽した。

私は父が亡くなるまでに就職しようと突然思い立った。医者は、父の生命は二、三日だ、という。私は慌てて新聞の求人欄を見た。その時、私の眼にとまったのが、勧業証券の調査部員募集の広告だったのである。

勧業銀行の中にあつたから、子会社に違いない。

それに私は、博奕好きで、その当時、株をやりたい、という気持もあつた。私は早速履歴書を送り、試験を受け、入社することが出来た。現在と違って試験も簡単で口頭試験だけだった。幸い入社試験に合格した通知を受け取った時、父はまだ生きていた。私は父の枕元に坐り、意識がもうろうとしている父に、

「お父さん、勧業証券に入社が決まりました」

大きな声でいった。

確かに父は、私の言葉が分ったようだ。何度も、そうか、そうか、良かった、と頷いた。そして、その夜、父は亡くなったのである。多分、父は、私の言葉に安心して、力尽きたのかもしれない。

振り返ってみると、私はもの心ついて以来、父とは絶えず、いい争い、時には撲り合ったりしたものだ。

真面目な電気技師だった父は、人生に対して自分なりの図式があり、それに当てはまらないと、怒るのだ。ところが私は、後年、作家になったぐらいだから、融通の利かない素直な考え方について行けない。

ついて行けない、というより真向から反撥してしまう。父親だから、形式的にでも妥協したらよさそうだが、それが出来ない。

だから当然、論争から親子喧嘩になってしまう。その喧嘩は、私が戦争から帰って来ても続いたのである。

父にとっては、私は気の重い息子だっただろう。だから、私が父の枕元に正座して、入社を報告したのは、父に対して、ただ一つの親孝行だったかもしれない。

父が亡くなったため、会社から退職金が出た。昭和二十三年だが、確か六十数万円あったような気がする。私が生計に受け取りに行ったのだ。当時では大金である。

この六十数万を、母と私と弟妹で分けることになったが、私は母と弟の分まで借りて、それを資金に株を始めたのだった。

儲けたり損をしたりしているうち、廃墟の日本経済を復活させた朝鮮動乱が起り、株が暴騰し、

私にもわか成金になった。

その当時の無茶苦茶な生活については、何度も小説にもしたし、自伝的エッセイ集『どばらや人生』にも詳しく書いてあるので割愛するが、兎に角、金に憑かれた毎日だった。そして、昭和二十七年、新劇女優の卵だったS子と結婚した。

株屋に入り、ただ売った買ったの博奕の世界に生きている私が、何故、新劇女優の卵などと、結婚したか、というと、私の胸の底に、放埒な日々により切っではいるが、作家になりたいという執念の蛇が、完全に死なずに、とぐろを巻いていたからだろう。

書き忘れたが、私は証券会社に入った翌年、つまり昭和二十四年に、週刊朝日が募集した記録文学に『北満病棟記』が佳作入選し、作品は発表されていた。

その時の編集者の紹介で、有名な同人雑誌の同人になったが、何度原稿を送っても、いつこうに載せてくれない。噂に聞くと同人に士官、下士官などの序列があつて、私のような新兵の作品は、めったに載せないらしい。文学の世界に序列などあるものか、と私は凄く腹が立ち、それよりも、株の方が公正だ、と小説を書くのをやめて、相場に熱中していたのである。

株が公正だ、というのは、何億、何十億という大金持ちでも、十万円ぐらいしか持っていない者でも、同じ銘柄の株を、自分の思った値段で買うことが出来るからである。

つまり、相場には、序列がないのだ。

私はその同人雑誌が有名だっただけに、文学の世界全体が、そうだと錯覚したのであった。ひよっとするとそれは、こつこつと枘目を埋める創作の苦しみから逃げる口実の一つだったかもしれない。

戦前では、中小証券会社には、大学出が余りいなかった。証券会社は株屋で、一人前になるには丁稚から叩き上げなければならない。相場に学問なんかいらないうのが、相場の世界の常識だった。ところが、戦後、財閥が解体され、財閥の持ち株が放出されて、証券民主化が行われた。株屋は証券会社になり、戦前の投機性は薄れ、相場の世界に、長期産業資金の調達、などという恰好の良い、お題目が掲げられた。

時勢に遅れまいと、中小証券でも、大学出を採用し始めたのである。

勧業証券の大阪支店が調査部を新設し、大学出の調査部員を募集したのも、そのためだった。そして、私を始め、応募した連中は、学徒出陣で戦争体験のある者が多く、敗戦後の価値転換で、虚無的になり、殆どが一攫千金を夢見て、相場の世界になだれ込んで来たのである。

だから、彼等は殆ど、自分のために相場を張り、儲けると、キャバレーや小料理屋で散財した。げてものを食べる会など始めたのも、虚無の中であがきながら、皮膚感覚の刺激を求めての結果だった。

このげてものを食べる会は、普通の人間が食べられないようなものを集め、一番多く食べた者が、場に積まれた賞金をいただくという、今考えれば、全く無茶苦茶な会であった。このげてものの会については、詳しく、“どばらや人生”に書いたが、あのエッセイの中で、真実と異なる点は、私が全身麻痺になった原因についてである。

“どばらや人生”では、腐った肉をわざと食べて、その結果が麻痺になった、と書いてあるが、あれは、話を面白くつくったので、真実ではない。確かに、腐った肉を食べたが、私が麻痺を起したのは、それから一カ月も先だった。

当時、私は会社の仕事をせず、自分の相場ばかり張っていたので、上役の覚えは目出度くなかった。

遅刻は毎日で、出勤簿に判も押さず、会社の調査に行くといって外出しては、他の証券会社に行き、普通の客と一緒に気配表を眺めて、売った買ったをするのである。

こんなことをしていて、上役が良く思うわけではない。ことに、東大出の支店長のS氏に睨まれ、遂に私は、黒板書きを命ぜられた。

つまり、今なら大学生がアルバイトでやっているような、単調な仕事で、刻々と変る株の値段を、白墨で黒板に書くのである。

これには、私も参った。一番の打撃は何といっても、気配表から離れるわけに行かないから、自分で相場を張れない。

それに、女子社員でも出来るような仕事で、私は、まさに社員や客のさらしものになった感じだった。私は恥辱に耐えられず、勸業証券を辞めようと思った。ただ素直に辞めては面白くないので、色々と考えた末、医院に行きレントゲンを撮り、肺浸潤という診断書を貰った。

私は、軍隊で満州に行った時、胸を悪くしている。

終戦後闇ブローカーをしていた頃、進駐軍から流れたストレプトマイシンを注射していたので、病気の進行は一応停っていたが、完治はしていない。レントゲンを撮ると、左鎖骨のあたりに曇りがあった。

医者は私に、一年休養の診断書をくれ、私は会社に突き出して、休職にして貰った。ざまをみろ、と舌を出したが、会社を休み始めてから一カ月めに大喀血をしてしまった。洗面

器に半分ぐらい出たような大喀血だった。

考えてみると、医者は私にだまされたのではなく、実際に曇りの部分は活動し始めていたから診断書をくれたのだった。その頃、結核の新薬として、パスが登場し、私はストレプトマイシンを注射し、パスを飲み、兎に角療養した。

株の方は朝鮮動乱の時に確かに当時の金で千五百万以上の儲けはあったが、その後かなり損をし、資金は三分の一ぐらいになっていた。

注射と薬のおかげだろう、三カ月ほど自宅で寝ていると熱も咳もなくなり、健康体と変わらないようになった。それでも用心して半年ぶらぶらしていたら、給料が半分になった。

自覚症状が全然ないので、私はまた勤め口を探した。そして、株専門の新聞紙が創刊されることになったのを知り、履歴書を持って社長に会いに行った。

勸業証券の調査部に五年もいた経歴が買われ、その場で採用された。その株の新聞は現在もあり、専門紙の中では有力な方らしい。

こうして私はまた、北浜に戻ったのだ。

私はその専門紙に相場の子想を書いた。

そのためには、毎日のように北浜を歩かねばならない。私はまた、自分自身で相場を張ったが、病氣している間に勘が鈍ったのか、旨く行かず資金はみるみる減って行つた。

ところが遊びの方は相変らずである。いや、相場が思うようにならないために、かえって酒を飲む。女遊びは、S子と結婚してからたまに浮気するぐらいに減っていた。自然酒量が増え、毎晩浴びるほど酒を飲む。結核が再発したなら、それはその時のことだ、とふてぶてしくなってい